

次の文章は、主に奈良時代の宝物を収めた正倉院とその宝物の保存・管理・展示（正倉院展）などについて述べたものである。これを読んで、後の問に答えなさい。（出題の都合上、本文に手を加えたところがある。）

一般的に特別展の観覧者数は人気を計るためのバロメーターであり、収益に直結するため、開催館にとっては大きな関心事である。しかしながら、観覧者の増加に伴う会場の混雑は好ましくないからざる事態であるため、開催館はその緩和を図るべく、さまざまな取り組みを行っている。たとえば、入館前の行列を解消するために、整理券を配布することがある。しかし、整理券に記された指定時間前にも行列が発生するほか、館内の目玉となる展示物前の行列は防ぎようがない。また、整理券の違法販売行為の事例も漏れ聞く。

令和三年（二〇二一）春に東京国立博物館で開催された「国宝鳥獣戯画のすべて」展では、展示ケース前にはじめて「動く歩道」が設置された。観覧者の滞留をコントロールする画期的な試みといえる。しかし、会場内全体の人の流れをコントロールしなければ、そこに至るまでに人が溢れることになりはしない。何よりも、「文化芸術立国」を掲げるわが国の博物館において、「誘導」という名の下で美術鑑賞にかける時間や見方を「**A**要」することについては、今後、論議を呼ぶだろう。

また、混雑が予想される特別展では、正倉院展と同様、人混みの後ろからでも見えるような配慮から、高い位置に展示品を並べている。その結果、子供を含めて、セタケの低い人にとっては展示物が見にくくなってしまっている。

高齢者や障害者を含む「観覧弱者」に配慮する場合、すべて日時指定制とするほかに混雑を解消する術はない。しかし、それでは観覧者の総数が減って収益も減少し、それを避けるために観覧料金の高額化に繋がってしまう。

すでにコロナ禍の前から、インバウンド客をターゲットとして観覧料金を高額化する構想はあった。だがそれは平均所得が高く、文化に支出する金額も高い欧米の消費事情を、日本にそのまま適用する危ういものである。確かに、「飛行機のファーストクラス」ほどまで高額でなくとも、「新幹線のグリーン席」程度の特別料金でゆつたりと鑑賞できるならば、それを望む声も需

要もあるだろう。

それでも、「エコノミー席」や「自由席」を一定数は確保しなければ経済的な弱者の排除に繋がってしまう。それは公益性をまったく無視したもので、ひいては文化の享受に格差を生むこととなる。

正倉院展は戦争で疲弊した国民を励ますことを目的に、皇室文化の至宝である正倉院宝物の展覧が望まれたことが端緒となり、今日まで開催されている。平成十三年（二〇〇一）に博物館が独立行政法人化してからも公益性に鑑み、正倉院宝物は無償で貸与され、主催は奈良国立博物館のみとし、民間企業が協力するという形での開催を維持してきた。

時代はめぐり、すでに第二次世界大戦による疲弊は癒え、観覧者と宝物の双方にストレスの生じている現状を鑑みた場合、正倉院展の開催のあり方について見なおす時期が到来したと感じていた。その矢先、コロナとの闘いのなかで、世界中で多くの人々が軽重問わず、芸術や文化を渴望し、正倉院展の開催についても、それを待ち望む多くの声が寄せられた。実はかつて正倉院展の開催については、その公共性の高さから、報道各社が挙って、奈良の秋の風物詩という採り上げ方をしてきたが、近年は一般的な特別展と同じく、協力・協賛社以外がその開催を採り上げることがはばなくなっていた。それが、コロナ禍における正倉院展については、その開催を喜ぶ人々の声をマスコミ各社が伝えることとなった。いずれにしても、いまだ正倉院展の意義は形骸化しておらず、今回のパンデミックのなかにおいても、その役割を再認識するに至った。

正倉院の構内に公開施設がなく、奈良国立博物館が同じ国の機関であったことなどから、同館において正倉院展が開催されてきた。しかし、行政改革の一環として、博物館が独立行政法人となり、すでに四半世紀近くが経過した。この先、利益優先の貸し館方式、あるいは運営を民間に委託するコンセッション方式に移行する可能性も否めない。

また、コロナ後は企業メセナといった社会貢献目的で行う芸術文化支援についても成立しづらい状況となり、正倉院展についても収益事業と化す不安は拭いきれない。これまでのように、即時的な販売促進や宣伝効果を求めないという企業側の姿勢も変わり、加えて博物館も独立採算制に完全移行するに至り、正倉院展に公益性を担保できない状況が来ないとはいいい切れぬ。

一般的な特別展のあり方を否定するつもりはなく、部外者が口を挟むものではない。しかし、少なくとも正倉院展については、

大がかりな広報を通じて集客し、収益を図る、いわゆるブロックバスター的な展覧会でありつづける必要はないという主張については聴^ききされよう。

正倉院宝物の公開には公益性を担保するため、^②「プレミア化」^①するようなことがあつてはならない。さまざまな要望や条件を勘案すると、収蔵庫に展示施設を併設し、常設展示することこそが、その最もふさわしいあり方といえる。宝物の展示数は多くなくとも、静かに鑑賞でき、低料金で、奈良に来ればいつでも覗^みられるようになることが、宝物にとつても、観覧者にとつても、最良の^イサクである。

常設の公開施設をつくる構想は昭和二十五年（一九五〇）の^{注三}日本学術会議の提言のうち、唯一果たせていない事柄である。新憲法下において、この提言によつて、正倉院がめざすべき方向性が示され、今日おおむね達成することができた。提言が正しかったことは何よりも宝物の現状が良好であることが物語っている。

それならば、正倉院展を開催している奈良国立博物館で宝物の常設展示をすればよいという意見もあるかもしれない。しかし、奈良国立博物館は奈良を中心とした神仏に関する美術を専門に展示するためのものであり、決して正倉院展のためだけにあるわけではない。

^{注四}勅封管理との兼ね合いをどうするかという課題は残るが、実現はまったく不可能なことではない。たとえば、勅封のかかる収蔵スペースをガラス張りにするなどの工夫をすれば、金属や石などで作られた^ウヒカク^ク的^ケ堅牢^クな宝物であれば、常時公開も対応可能になり、安全性を確保しながら公開の幅を拡充することもできる。

正倉院宝物と同じく古文化財を保存し、さらに公開もしている東京国立博物館の法隆寺献納宝物館のような専用の収蔵展示施設はそのモデルとなる。法隆寺献納宝物館は正倉院宝物よりも古い法隆寺の寺宝類を良好な保存環境を保つたまま展示している。おおむね常設ながら、脆弱^ベ弱^クな木漆工品はそのゾーンの公開期間を限定するなど、運用上の工夫がなされている。

このような展示施設が実現すれば、現行の正倉院展のように、宝物をダイジェストで紹介する、いわば「正倉院の宝物」展とは趣きの異なる、正倉院に関わる本質的なことを理解できるような展示、つまり本当の意味での「正倉院」展が可能となる。

正倉院宝物とほぼ同時代に描かれた「飛鳥美人」で知られる国宝高松塚古墳壁画が^カ微^カの被害を受けたことは記憶に新しい。その後、文化庁は石室を解体し、環境の整備された修理作業室に運んで修理している。現在は予後を見守りつつ、横たわる石室の各壁面を、さながら無菌室の新生児を覗^ぞくように、ガラス越しに見学するようになっている。

かろうじて救われた、いにしへの美人画を見るために、多少の不自由さを厭^{いと}うことなく、わずかな公開期間のなか、見学日時を予約してでも訪れる人は絶えない。正倉院宝物も含め、このような脆弱な古文化財の公開のあり方については、いずれ国民的^{注五}なコンセンサスが得られるものと信じてやまない。

（西川明彦『正倉院のしごと 宝物を守り伝える舞台裏』による）

注一 インバウンド客^ニここでは海外から国内（日本）へ訪れる外国人旅行者のこと。

注二 企業メセナ^ニ経済的に成り立ちにくい文化・芸術活動に対する企業の支援のこと。

注三 日本学術会議^ニ日本における科学者の代表機関であり、内閣府の所管である。科学に関する重要事項の審議および政府への答申・勧告などの活動を行っている。

注四 勅封^ニ古代以来、天皇の権威に基づいて正倉の扉の開閉は厳格に管理されており、これを勅封という。なお、現在は勅封の開閉はあくまでも国が管理しており、天皇は決定事項の確認を行っている。

注五 コンセンサス^ニ合意のこと。

問一 傍線部アイウのカタカナ部分を漢字に直しなさい。

問二 空欄Aについて、本文の趣旨に適した漢字一字を書きなさい。

問三 傍線部①について、過去と現在における「正倉院展の意義」とはどのようなものであると筆者は考えているのか、本文に即して説明しなさい。

問四 傍線部②「プレミア化」について、具体的にはどのようなことを指しているのか、本文に即して説明しなさい。

問五 今後の正倉院展の開催のあり方について、いかなる理念のもとにどのような施設と展示内容を企画すべきであると筆者は主張しているのか、本文全体の内容をふまえて説明しなさい。

◇M1(039—6)

(次のページにも問題があります)

◇M1(039—7)

次の文章は、仕事を通じて親しくなった「聖」と「わたし」の関係を「わたし」の視点から描いたものである。(出題の都合上、【一】【二】【三】の三つの部分に区切っているが、話は続いている。)これを読んで、後の問に答えなさい。

【一】

石川聖は、恭子さんが紹介してくれた大手出版社の社員で、その巨大な会社注一の校閲局注一に所属していた。

彼女自身も校閲の仕事をしているけれど、フリーランスの校閲者や外部のプロダクションなどの窓口もしていて、注三ゲラや原稿やデータの受け渡しの多くは彼女が担当していた。

仕事のやりとりは、メールと電話と宅配便があれば、それでほとんど間にあってしまうのだけれど、聖と一緒に仕事をするようになって冬をひとつ越えて数カ月が過ぎる頃には、ちよつとした用事でも、それからとくに用事がなくても、仕事の進み具合はどうなのなんて言つて彼女はちよくちよく電話をかけてくるようになった。

【二】

わたしはじめて聖に会つたのは、恭子さんに頼まれてアルバイトを始めた最初のころ、社員校閲者やほかのフリーランスの校閲者を交えてお互いの紹介や挨拶もかねて開かれた新年会でのことだった。わたしは恭子さんから転送されてきた案内を眺め、三日以上も悩んで、出席することにしたのだった。

聖の髪は耳がすこしみえるくらいの短さで、きれいな茶色に染められていた。そしてとてもきちんと化粧をしていた。雑誌やポスターやテレビなどではなく、こんなにはっきりしたつくりの顔をこんなに近くでじつさいにみるのははじめてのことだった。何か特殊なふちどりでもなされているかのように聖のまわりには独特の雰囲気がちよこめていて、ほかの場所にくらべてそこだけが数段明るく照らされているようにみえるほどだった。

聖は誰にたいしてもはっきりとものを言う性格でもあるらしくて、その会の終わりごろ、ちよつとしたことがきっかけで同席していた男性編集者と口論になったのだけれども、彼女は最後には相手を完全に黙らしてしまった。ふたつ隣の席ですべてのやりとりを目撃していたわたしは、聖の口から効果的になりだされる挑発的な言葉や言い切るような力強さや言いまわし、それから相手がむきになって口調が激しくなってくると、ときどきまわりにちらつと目をやつて笑つてみせる仕草などにわけのわからない興奮を感じたのを覚えている。頭の回転がはやくて、その場の雰囲気やさつと見極め、ときには気の利いた冗談を言つて相手を笑わせたりもできる、わたしには想像もつかないような能力をいくつも持った女性だということを知るには——そんな能力にまったく縁のないわたしでさえ、その数時間があればじゆうぶんだった。

聖とわたしはおなじ年で、町はとも離れていたけれどおなじ長野県の出身だった。そのふたつと性別をのぞけばわたしたちのあいだに共通点と呼べそうなものはひとつもみあたらなかったのに、どういうわけか聖はわたしにとっても親切にしてくれた。

新年会からすこししてから具体的にアルバイトのやりとりを始め、何度かゲラの受け渡しと確認のために会わなければならなかったとき、わたしはいつもとても緊張していたけれど、聖はそんなこちらの緊張をまるで最初から存在しないみたいにしてふるまってくれるので、わたしの肩からはちよつとずつちからが抜けてゆき、すこしずつ、仕事以外の話をするようになっていった。わたしはほとんど聖の話をただきいていただけだけれど、聖はわたしのことを面白い人だと言つてほんとうに面白そうに笑つてみせるのだった。ときどき、どこが面白いの、ときいてみても、どこって、ぜんぶ面白いじゃない、と言つてまたうれしそうに笑うだけで、まともにとりあつてはくれなかった。そのたびになんと答えてよいのかわからず、わたしは黙つてうつむいていた。すると聖はわたしにむかつて、いいのよ、それってべつにわたしにしかわからない面白さだから、わたしが楽しんでるだけなんだから、あなたがわからなくても落ちこむことはないわよ、と言つてまたにっこりと笑うのだった。聖にくらべてわたしはそんなにたくさんはしゃべれなかったけれど、ときには時間を忘れてそんなひとときを楽しんでいることに気がつくこともあつて、そんな自分にしずかに驚いていたのだった。

そんなふうには仕事で顔をあわせるようになって一年が過ぎたころ、ある打ちあわせのあとで、会社はどうなの、と聖がきいてきた。

仕事したいはとてもやりがいがあるし、自分にもとてもあっているとは思いますが、じつは居心地はそんなによくはないのだということをお話しは遠まわしに話してみた。要領をえないようなわたしの話が終わると、聖はわたしの目をじっとみて、そんなの、と短く答え、それからしばらくふたりとも黙っていた。聖は何かを考えているみたいな表情をして黙ったまま何も話さないので、もしかしたらさっきの話を愚痴というふうに受けとられたのではないかと心配になった。聖は純粹に仕事の話を——たとえば今とりかかっているゲラのことや段取りなんかについてきいていたのに、わたしがそれとは関係のない、つまり聖にとつてはどうでもいいような職場の雰囲気の話をしてしまったせいで、もしかしたら聖を呆れさせたか、それとも気分を害してしまったのかもしれないと思ってわたしは急に不安になった。けれど、どうすればそういうつもりで話したのではないということをお話しされるのかわたしにはわからなかった。うまく話せる自信がなく、余計なことを言ってしまった、どうすればいいのかと黙りこんでいると、だったらフリーランスでやるのもありかもしれないよね、という聖の声がした。

え、とわたしは顔をあげて、聖の顔をみた。聖は目のわきをきれいな色のついた爪のさきで何度か小さく掻きながら話をつづけた。

「フリーランスっていつでも、お給料とか保険とか、今がどういう感じなのかわたしにはわからないから無責任なことは言えないんだけど、あなたくらいきちんと仕事をしてる人だったら月に四本フルで仕事を受けて——そうだね、月に三十万はいけると思うな。もちろんむらはあるだろうけれど、——そうね、それくらいはいけると思う」と聖はわたしの目をじっとみつめて言うのだった。

「それ以上は、頑張りしだいって言うところだと思う」

聖の気分を損なったわけではなかったことを知って、わたしはため息をつきたいくらいに安心したけれど、フリーランスとか月に三十万とか、むらとか、ほかに、あなたくらいきちんと仕事をしていれば、というようなわたしにたいする聖の評価の言葉とか——思いがけず聖の口からでてきたそんな言葉のいくつかに混乱して、わたしはまた黙りこんでしまった。

「どうかな、あなたどう思う？」

のぞきこむようにしてたずねる聖に何度か背いてみせ、頭のなかでさっき聖が話したことの内容をくりかえしてみた。フリーの校閲者。聖はわたしに、フリーランスで校閲者をやってみるといこうかたがあると言ってくれたのだった。いまアルバイトで受けている仕事をメインにして、そしてフリーになって、会社を辞める。そうすればわたしはもう会社に行かずにすみ、今の仕事を自分のペースとやりかたでつづけることができるかもしれないという、そういう話を聖はしたのだった。

これからは家で、フリーの校閲者として生活をする。わたしは何度も頭のなかで声にして、そう言ってみた。すると、会社を辞めるなんてことも、それからもちろん自分ひとりで今の仕事をするなんてこれまでただの一度も考えたことがなかったはずなのに、ひとたびこうして言葉にされてしまったのをもう一度頭のなかでつぶやいてみると、どういうわけか、それはだんだんひどく現実的な重さと響きをもちはじめ、そもそもわたしにはそれ以外の選択がなかったんじゃないかというふうにさえ感じられて、自分の都合のよさに頬の赤らむ思いがするのだった。

わたしは会社のことを思った。あの雰囲気をのことを思いだしてみた。毎日どこか行く場所があるということの安心のほかに、いったいあの場所にどんな大切なことがあるのだろうとそんなことをあらためて考えてみた。いつも右手の棚にみえている薄手の段ボールでできたお菓子の箱。誰かのマグカップ。ほとんど灰色になったホワイトボード。パソコンの画面。きりきりと音をたてて痛みだすこめかみの感触。誰とも言葉を交わさない、しずかだけれど、でもどこまでもつづくまるで暗い夢のような時間。同僚たちの目のかたち。キーボードを叩く音。そんないくつかの映像のあいまに、わたしに読まれることを待っている、まだ印刷されたばかりの文字がびっしりとつまった真っ白いゲラがあらわれて、すこしだけ温かみのようなものを与えてくれるのだけれど、瞬きをするとその白く発光する手触りはすぐに見慣れた沈黙の奥へ消えていくのだった。

わたしの年収は三百二十万だった。

会社にいれば、ただ割り当てられた仕事をこなしていくだけでお給料をもらえるのはありがたかったけれど、でも聖がさつき言ったように——もしも、もしも定期的に校閲の仕事をもたらうことができれば、フリーランスで生活していくのは可能性のまったくないことではないような、いよいよそんな気がしてくるのだった。アルバイトを始めて一年がたとうとしていたけれど、わたしに回ってくるゲラの数も収入もとても安定していたし、誰もいない家でひとりきりでゲラに向きあい、そのひとつひとつの言葉と文章をゆつくりと洗いなおすことは、まるでおなじ内容の仕事とはいっても会社でするのはまったく違う充実感で満ちていた。

「そんなことができれば、すごく、いいよね」とわたしは独りごとみたいに言って小さく笑った。笑うつもりはなかったのだけれど、どんな顔をしてよいのかとつさに判断がつかなくて、なんだかふだんから何も考えずにぼうつと生きていることを告げているような笑いかたになってしまった。わたしの胸は暗く波うち、おしぼりで何度も指さきをぬぐった。

「じっさい、フリーの校閲者はすごく多いけどね」聖は明るい声で言った。

「二十年以上、それでやってる人もいるし」

「二十年」とわたしは言った。

「そうよ。二十年」聖はにっこり笑った。

「……でも、毎月、仕事がある、……なんていうのかな、その、保証みたいなのって、もちろんないと思うし」

こんなことを聖にきくかどうかとどう思われるのかとさらに不安な気持ちになったけれど、わたしは思いきって言うてみた。すると聖はわたしの心配をよそに真剣な顔をしてこちらをじっと凝視し、もちろんそこはすごく大事なところよ、と言っつて力強く肯いてみせた。

「当然だけどうちの会社は本をつくらない月なんてないし、もちろん今わたしがすべての約束なんてできないけれど、局長もあなたの仕事をほんとうに高く評価してるし、もつと受けてもらえると助かるのにつて、よく話しているのよ。ほんとうよ、これだから、あなたがもしもフリーになって、やってもらえるゲラが増えるんだとしたら、こちらとしてもほんとうにありがたい話

であるのは事実なのよ」と聖は言った。

「そうなの」わたしはすこし驚いて、聖の顔を見た。

「そうよ」と聖はわたしの不安を押しつけるように、すこしおおきな声で言った。

そうなの、とわたしはもう一度言うてからため息をひとつついてしまうと、顔が自然にゆるんで今度はふつうに笑うことができた。

「わたしはね、信頼できる仕事をする人がすきな」しばらくして、聖が言った。

「信頼？」

「そう。信頼」そう言うとき聖はうれしそうな顔をして笑った。

「それはね、信用っていうのはまたちよつと違っていて——なんていうのかな、読んで字のごとく、まあ、頼れるところがある、ってことなんだけど」

わたしは背いた。

「信用っていうのは、信用貸しとかいう言葉もあるくらいでさ、この人とは利害が一致するなと思ったら——つまり、人って一方的に信用したりしなかったりすることができないじゃない。だからそこには相手がない感じがするのよね。つまりいったん信用したとしても、何かのちよつとした加減で、そんなのいつでも信用できなくなることまでできるっていうか」

「うん」

「その意味では、信用なんてたいしたことじゃないのよ。ちよつとした都合や風向きで簡単になかったことにできるものなのよ。でもね、信頼っていうのはわたしにとつてそうじゃないのよ。信用と信頼は、ちがうの。信頼したぶん、わたしも相手に、何かをちゃんと手渡しているって、そういうふうを感じるの」

聖はそう言いながら耳のうしろを掻いた。

「そして、ひとたびその相手を信頼したら、その信頼は消えることはないのよ」

わたしは黙ったまま聖の言葉に肯いた。

「そういうものなの。それでね、わたしが信頼するのは、すきとか恋愛とか、愛とか——そういうところから出発するようなものじゃなくて、まずその人の仕事にたいする姿勢であるってことなの」

「仕事の姿勢？」わたしはきかえした。

「そう。姿勢。仕事にたいする姿勢よ。そこにはね、その人のぜんぶがあらわれるんだって、そんなふうにはわたしは思ってるところがあるのよ」

「それは、真面目さとか、……そういうの？」とわたしはきいてみた。

「そうね」と聖はちよつと考えるようにしてすこしのあいだ天井のほうをみつめてから、何度か肯いた。「平たく言えば、そういうことかも知れない。仕事ってね、それが家事でも、スーパーのレジ打ちでも、たとえば^{注四}デイトレードでも肉体労働でもなんでもいいの。種類でもなければ、結果を出すとか出さないとか、そういうものでもないの。結果なんて運もあるし、そんなものいくらでも変わるもの。他人なんていくらだって言いくるめることはできるし、ごまかすことだってできるしね。でも、自分だけ嘘はつけないもの。自分の人生において仕事というものをどんなふうにとらえていて、それにたいしてどれだけ敬意を払って、そして努力しているか。あるいは、したか。わたしが信頼するのはそんなふうには自分の仕事とむきあっている人なのよ。——こう言っちゃうとなんだかまるきり時代錯誤の馬鹿みたいなんだけど、わたしはそう思ってるところがあるのよ」

「それは」わたしは何度か肯いて言った。

「そういうのは、どこでわかるの」

「そんなの、ちよつと付きあつて、話して、仕事をみれば一発でわかるわよ」と聖はにっこり笑って言った。

「わかるの」

「わかるわよ」と聖は唇のはしっこを両方にくつとあげて、当然というような顔でわたしをみた。

「そして、わたしはそういう人のことだけをすきになるの」聖はにっこりと笑って話をつづけた。「そして、そういう人に向けら

れたすきという自分の気持ちを、わたしは信頼しているところがあるの。だから、すきとか愛とか——まあ愛というものことについてはあまり考えたくないけれど、最終的に残るのはそんなふうになんか変質したり単純に消滅したりしてしまうようなものじゃなくて、やはり信頼なのよ」

そう言うと、聖はわたしをじつとみつめた。

「それで、わたしはあなたを信頼しているの」

「わたしを？」わたしは驚いて言った。

(川上未映子『すべて真夜中の恋人たち』による)

注一 校閲局⇨原稿・印刷物などの不備や誤りを調べ直す部署。

注二 フリーランス⇨自由契約。

注三 ゲラ⇨校正刷り。

注四 デイトレード⇨一日のうちに売買を終えて利益を得る株式取引。

問一 【二】の部分で「わたし」がとらえた「聖」の印象を本文に即してまとめなさい。

問二 傍線部①のように「わたし」が反応したのはなぜか、説明しなさい。

問三 傍線部②「都合のよさ」とは具体的にどのようなことか、説明しなさい。

問四 傍線部③のように「わたし」が笑うことができたのはなぜか、説明しなさい。

問五 傍線部④の「信用」と「信頼」のちがいを「聖」はどのようにとらえているか、説明しなさい。

次の文章は、白河法皇が北面の武士たちに任国へ下るまねをさせて御覧になった際の出来事である。これを読んで、後の問に答えなさい。

これも今は昔、白河法皇、鳥羽殿におはしましける時、北面の者どもに、受領の国へ下るまねせさせて、御覧あるべしとて、玄蕃頭久孝といふ者をなして、衣冠に衣出して、その外の五位どもをば前駆せさせ、衛府どもをば、胡籙負ひにして御覧あるべしとて、おのおの錦、唐綾を着て、劣らじとしけるに、左衛門尉源行遠、心殊に出で立ちて、「人にかねて見えなば、めなれぬべし」とて、御前近かりける人の家に入り居て、従者を呼びて、「やうれ、御前の辺にて見て来」と、見て参らせてけり。無期に見えざりければ、「いかにかうは遅きにか」と、辰の時どこそ催しはありしか、さがるといふ定、午未の時には、渡らんずらんものをと思ひて、待ち居たるに、門の方に声して、「あはれ、ゆゆしかりつるものかなゆゆしかりつるものかな」といへども、ただ参るものをいふらんと思ふ程に、「玄蕃殿の国司姿こそ、をかしかりつれ」といふ。「藤左衛門殿は錦を着給ひつ。源兵衛殿は縫物をして、金の文をつけて」など語る。怪しう覚えて、「やうれ」と呼べば、この「見て来」とてやりつる男、笑みて出で来て、「大方かばかりの見物候はず。賀茂祭も物にても候はず。院の御棧敷の方へ、渡しあひ給ひたりつるさまは、目も及び候はず」といふ。「さていかに」といへば、「早う果て候ひぬ」といふ。「こはいかに、来ては告げぬぞ」といへば、「こはいかなる事にか候ふらん。『参りて見て来』と仰せ候へば、目もたたかず、よく見て候ふぞかし」といふ。大方とかくいふばかりなし。さる程に、「行遠は進奉不参、返す返す奇怪なり。たしかに召し籠めよ」と仰せ下されて、廿日余り候ひける程に、この次第を聞こし召して、笑はせおはしましてぞ、召し籠めは許りてけるとか。

(『宇治拾遺物語』による)

注一 北面の者||北面の武士。院の御所を警護する武士。

注二 前駆||馬に乗って先導すること。また、その者。

注三 衛府||宮中を護衛し、行幸の供奉をつかさどる役所の総称。また、そこに所属する武官。

注四 胡籙||矢を入れて携える武具。

注五 やうれ||目下の者に呼びかけるときにいう語。やあ。やい。おい。

注六 無期||久しいこと。

注七 といふ定||「とはいふものの」の意。

注八 縫物||縫い取り。刺繍。

注九 賀茂祭||京都の上賀茂神社と下鴨神社の祭り。

注十 進奉不参||伺候しないこと。

問一 傍線部アイウエを現代語訳しなさい。

問二 破線部①について、源行遠の行動の理由を本文に即してわかりやすく説明しなさい。

問三 破線部②について、源行遠が不審に思ったのはなぜか、本文に即してわかりやすく説明しなさい。

問四 白河法皇が源行遠の謹慎処分を解いた理由を本文に即してわかりやすく説明しなさい。

問題 四

次の文章は、蘇軾(一〇三六〜一一〇二)が友人の文与可(一一〇一〜一一〇七)から竹の絵の描き方を教わり、その経験をもとに考えを述べたものである。これを読んで、後の方に答えなさい。(設問の都合上、訓点を省略した所がある。)

竹^の之^の始^{メテ}生^{ズルヤ}、一^の寸^の之^の萌^き耳^{のみ}。而^{しか}節^の葉^を具^ス焉[。]自^{より}蝮^で腹^{ふく}蛇^だ蚘^ふ以^{もつ}至^ル于^ル劍^{注二}。拔^{注三}十^ニ尋^ニ者^ハ、生^{マレナガラニシテ}而^ル有^レ之^也。今^ノ画^ガ者^ハ、乃^ハ節^{トシテ}節^{トシテ}而^シ為^レ之[。]葉^ハ葉^{トシテ}而^シ累^{カヌ}之[。]豈^ア復^{マタ}有^{ラン}竹^ヤ乎[。]故^ニ画^{クニハ}竹^ヲ必^ズ先^{マツ}得^ヨ成^ヲ竹^ヲ於^ニ胸^ニ中[。]執^{トリ}筆^ヲ熟^{スレバ}視^バ、乃^チ見^ル其^ノ所^ノ欲^{スル}画^{カント}者^ヲ。急^{注四}起^{シテ}從^ヒ之^ニ、振^{ヒテ}筆^ヲ直^{注五}遂^シ、以^テ追^{フコト}其^ノ所^ヲ見^ル、如^{ゴトクセヨ}兔^{注六}起^ル。鶻^ハ落^ル。少^{注七}縱^ル、則^チ逝^ク矣[。]

与^{フル}可^{コト}之^ノ教^ヲ、予^ハ如^レ此[。]予^ハ不^ル能^ハ然^ル也[。]而^{ルニ}心^ヲ識^ス其^ノ所^ヲ以^テ然^ル。夫^ハ既^ニ心^ヲ識^ス其^ノ所^ヲ以^テ然^ル、而^{シテ}不^ル能^ハ然^ル者^ハ、内^ノ外^ノ不^レ一^{ナラ}、心^ノ手^ノ不^レ相^{アヒ}應^ゼ、不^ル学^バ之^ノ過^也也[。]故^ニ凡^ニ有^ル見^ル、於^ニ中^ニ而^{シテ}操^ル之^ヲ不^ル熟^セ者^ハ、平^{注九}居^{ミツ}自^ラ視^ル、了^{注十}然^{タル}、而^{シテ}臨^ル事^ニ忽^{注十一}。

焉^{えん} 喪^{さん}之^の 豈^あ独^{ひとり}竹^の 乎^や。

(蘇軾『東坡集』による)

- 注一 蝮腹蛇蚘|| 蝮の腹、蛇が脱皮したあとの皮に見られる横紋。ここではタケノコを形容したもの。
- 注二 劍拔|| 抜きはなつた劍のように鋭くまっすぐな様子。
- 注三 十尋|| 約十八メートル。ここでは竹が極めて高く成長すること。
- 注四 急起|| すぐにはじめること。
- 注五 直遂|| ひたすらにまっすぐ進むこと。
- 注六 兔起鶻落|| ウサギが跳ねたり、ハヤブサが急降下したりすること。ここでは動作の速いこと。
- 注七 不学之過|| 練習が不十分なことによる失敗。
- 注八 見|| ここでは理解すること。
- 注九 平居|| ふだん。
- 注十 了然|| はっきりとわかっているつもり。
- 注十一 忽焉|| たちまち。

- 問一 傍線部①を現代語訳しなさい。
- 問二 傍線部②は、具体的には何がどのようなことになることか、簡潔に述べなさい。
- 問三 傍線部③をすべて平仮名で書き下しなさい。
- 問四 傍線部④について、筆者は何を言おうとしているのか、この段落の内容をふまえて簡潔に述べなさい。